婚姻

佐賀　彩美（さが　あやみ）
一般社団法人北海道開発技術センター
調査研究部研究員

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレー国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モントレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

アイヌ民族の婚姻は、自由恋愛の場合と親同士が相手を決める場合、二とおりありました。恋愛結婚の場合は双方の意思が一致しているので問題ありませんが、親同士が相手を決める場合は、成人後に、必ずしも本人が同意するとは限りません。当事者の片方が気が進まない場合には破談にすることもできました。その際は、仲介者をたて、慰謝料として物品を供出し、お詫びすることで解決したとのことです。うまく結婚話がまとまると、一対の耳輪の片方やアットゥシ（衣類）を相手に贈るなど、婚姻関係を結ぶ「契り」がなされていました。婚姻は、血が濃くなる近親婚を避けるだけでなく、他との友好関係を密にすることで、同じ集落ではなく他地域の人と相互扶助の関係を成立させておくことが未来への大きな布石となっていました。そのきっかけが婚姻であったのです。熊祭りのような冬の祭りは、他地域から食料持参で参加することから、配偶者を見つける絶好の機会となりました。

両家の親同士による話し合いがまとまり、好ましい異性と自覚すれば、女性からは男性に手作りの刺繍をほどこした小物、男性は自分が彫った小刀などを女性に贈ります。贈られたものを相手が身に着けることで、確実に結婚の意志が相互に受け入れられたことになったのです。

婚姻に際しては相手の家の家紋が重要です。男性の家紋は、先祖とされるシャチやクマ、シマフクロウなど地域ごとに共通していました。紋はこれらの生物を抽象化した線で表したものです。紋を受け継ぐのは男性で、女性は母親から、結婚適齢期になると締めるラウンクッ（ra－下 un－にある kut－帯）という下紐（下帯）を受け継ぎ、その編み方で家系を示しました。下紐というのは、イラクサやツルウメモドキの繊維を雪に晒したもので編み、片端に房飾りをつけた紐で、編み方や締め方は家系によって全く異なります。男性の個人紋は、矢に刻んで狩猟の際、誰の獲物かを示すという役割もありましたが、女性の下紐は、女系を表すものでした。例えば、男性は自分の母方の女性、つまり母親と同じ編み方の下紐の女性とは従妹でも結婚できないきまりでした。

ところで、日本も戦前までそうであったように、アイヌ社会でも正妻のほかに第二夫人、場合によっては第三夫人が認められていました。現代の男性にとっては羨ましい制度であったと思われるかもしれませんが、これは、生活を支える日々の労働の負担が重かったため労働力を確保する必要があったこと、また、医療もうけられず幼児の死亡率が高かったため、リスクを軽減する手段だったといえます。夫婦が年老いてきた場合、子どもが授かることを期待して、妻が夫に若い第二夫人を持つことを勧めることも珍しくありませんでした。第二夫人に子どもが生まれると、最初の子は第一夫人が実子と分け隔てなく育てます。これは、自分が出産できない時期に入り、生きがいを喪失しかけている時に新しい目標ができ、心身共に若返り、いつかは老後に介護を受け、亡くなった後には供養されることを希望していたようです。第二子以降は第二夫人の子となります。自然状況に左右される生活では狩猟、漁業の作業中の事故も多く、家族が多いほうがリスクは下がるという合理的な考えです。江戸時代、日本の武家社会でも家の存続のため同じようなことがなされていました。夫が存命中も、亡くなってからも第一夫人と第二夫人は感情的に対立することもなく、互いに協力しあって仲良く暮らしました。これも自然相手の厳しい生活環境から生まれた制度であったからこそといえると思います。

＊本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として（一社）北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村　久和　氏　北海学園大学名誉教授　北日本文化研究所代表　アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般（精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等）を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査（北海道教育委員会）に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する傍ら、國學院大學北海道短期大学部（滝川市）で開催のベカンペ祭で伝統料理を提供している。主な著書：『アイヌの霊の世界』（小学館、1982年）、『アイヌ、神々と生きる人々』（福武書店、1985年）、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛氏との共編、小学館、1990年）、『知里真志保フィールドノート(6),(7)』（北海道教育委員会、2007, 2008年）、『平成20～令和３年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査１～12』（北海道教育委員会、2008～2021年）等。